



ジェントルハート通信

No.65

2020年秋号

発行:NPO法人ジェントルハートプロジェクト 発行日:2020年12月15日

URL: <http://npo-ghp.or.jp> Tel. +Fax. : 045-845-3620(小森)

定価:100円(会員無料)



「ポストコロナをどう生きるか」

代表理事 小森新一郎

本年春に前回のジェントルハート通信を発行してから半年以上の時間が過ぎてしまいました。皆様への活動報告もなかなかできず、心苦しく感じております。

ジェントルハートプロジェクトの活動もご多分にもれず、新型コロナの影響をまともに受け、いままで経験したことのない低調な活動を余儀なくされています。

すでに4月の通信発行時点において最大の懸念材料として記事に載せておりました新型コロナウイルスの感染状況についても、当時の予想を遙かに上回る感染拡大を示すようになってきました。そして同時に心配していた社会の分断も、若者と年配者といった市民同士はもとより、政府と地方、大都市と地方都市、経済界と医療現場、医療スタッフと地域住民、といったように、日本全体がその大きな分断の渦に巻き込まれているようです。

私はこのような状況の中にあって、非常に大きな違和感を感じていることがあります。それは、国内において直接的に人命に関わる感染予防対策という医療問題と同列にGO TO等の経済振興策が進められている問題です。確かに経済困窮による自殺者の激増も人命に関わる問題なので、これはこれで別の視点から議論する必要があるのは当然ですが、何でもかんでも一緒に論じる事で、逆に本当にやるべき優先順位を見えにくくしているのではないのでしょうか。

実際ニュース等で世の中の動きやお金の流れで見ても、見えない力学が働いているように感じています。ウィズコロナ(コロナとともに)という考え方のそのものが“最初からある程度の犠牲は織り込み済み”と言っているように感じてしまうのは私だけでしょうか。本来的には同時進行で進められるような類いのものではないと思います。

まずは徹底的な感染封じ込めを成功させた後、次の段階として再始動を支えていくための対策を打っていくといったようなステップバイステップの対応が重要になると思います。

今行われている二兎を追う中途半端な対応をとり続けている限り、解決までに、より多くの時間がかかってしまうというのは明らかです。

いじめ問題でも加害者側は“一旦いじめ行為を始めてしまうとなかなかやめられない”という事情があるようです。ある意味で今の行政のシステムにおいても同様の傾向が見られるのではないのでしょうか。

自分のまわりをよく見直し“一旦立ち止まる勇気”を持つことが必要ではないのでしょうか。

世界に目を向けると、PCR検査の無償化を積極的に進めている国もあれば、きめ細かい所得保障をしつかり進めている国もある。という話をよく聞きます。

そうした話を聞くにつけ、今の日本は一体いつまで迷走を続けるのかと、とても不安です。

そして、コロナ問題発生当初の頃は話題になっていた子どもたちに関する問題も、近頃ではすっかり影を潜めていて、明らかに子どもの優先順位が後回しにされている現実を実感します。

すべての国民が大きなストレスにさらされている中で、子どもへの配慮がどんどん脇に追いやられてしまっており、そのツケが子どもたちの育ちに深刻な悪影響となって表出することがとても心配です。

今回のように予測不能な事態に直面した社会において、生活をする上で重要なのは、真実を見極める眼力をしっかり持つことだと思います。エビデンス(証拠)のない噂話に右往左往したり、安易に納得したりすることが、非常に危険なことだと感じています。

いまの対応状況が続くと、いざポストコロナとなって日本社会が再始動モードになった時に、それを支える国民が一体どのような精神状態になっているかを想像しただけで、背筋が寒くなります。

常々申し上げていることですが、今回のコロナ禍によってもたらされるようなギスギスした社会を元に戻していくためには、何をさておいても互いを思い合う“やさしい心”が重要なキーワードになるだろうと思っています。他人を責め合うことのない人々の繋がりがこそが強固な絆を生み出すのではないのでしょうか。

近頃よく見られる医療従事の保護者に対して発せられる心ない言葉や、コロナ感染者やその家族に対する過剰な排除傾向は、まさにいじめに見られる構造とよく似ています。やはり“いじめ”といった人権に対する攻撃で考えてみると、それは子どもの世界にとどまらず、ストレスフルな社会に比例して、内在する攻撃性が高まっていくのではないかと考えます。

一日も早くコロナが収束し、子どもも大人も、互いに思いやりを持って接することが出来る社会となり、子どもはもとより、みんなが笑顔で暮らしていける日本になることを心より願って止みません。



「子どもたちを取り巻く環境について」

現在の子どもたちを取り巻く環境は、『虐待』『貧困』『いじめ』といった問題が山積しているにもかかわらず、更に新型コロナ感染が加わり、大きな負担としてのしかかっています。

子どもたちが幸せを追求する環境が整っているとは言い難い状況が続いています。この状況を改善するには障害も多く、まだまだ時間がかかりそうですが、放置してはならないことは言うまでもありません。

ユニセフ（国連児童基金）は、高所得国41ヶ国で新型コロナ流行に伴う子どもへの経済支援が不十分であり、今後更に5年間は子どもの貧困が新型コロナ流行前の水準を上回ると予想しています。

子どもの命を守るためには、貧困家庭への経済的支援が必要ですが、私たちの国で、それが十分に行われていると言えるでしょうか。

厚生労働省は生活がひっ迫している「ひとり親世帯」に対して、年内に2度目の臨時特別給付金を支給すると発表し、1世帯あたり5万円、2人目以降3万円を加えたということですが、これは定期的・継続的な支援でなければ命を守っていくことはとても難しいと思います。貧困が自殺の激増に拍車を掛けていることに想像を及ぼせて欲しいと思います。

またユニセフは更に、子どもの幸福度調査も発表していますが、世界38カ国中で日本が37位でした。

その事からも子どもたちの生活環境がより深刻化しているという事が伺えます。

日本は経済的には比較的恵まれていながら貧困家庭が増えているという矛盾した現象があります。

社会的な格差が広がる中その犠牲になっている人々がコロナの犠牲者にもなっているように感じます。

また、身体的健康の分野では日本は世界1位でした。医療体制も整い、命が守られる環境は整っているにもかかわらず、精神的幸福度では、自殺率の高さや生活満足度の低さから、調査国の中で最低レベルの37位となっているのです。

順位を大きく引き下げている原因の1つである自殺についてですが、文部科学省の発表している令和元年の小中高등학교からの報告では317名でした。

子どもの人数が減っているにもかかわらず、平成27年215名であった自殺者数が317名にまで増加しているという現実を皆さんはご存じでしょうか。

実は日本の子どもたちの死因の第一位が自殺でした。病気ではなく、事故でもなく、自殺が子どもたちの死因一位であるという事実を、大人たちは重大に受け止め、対策を講じる必要があります。

医学の進歩によって守られる命が増えているのですから、同様にいじめの対応も進歩していなければならないはずですが。

しかし、残念ながらいじめ対応についての進歩は見られません。過去のいじめ事件をしっかりと検証し、反省をし、いじめ対応を学ぶ必要があったのです。それが出来ていたら守れた命は多くあったはずですが。

私はメディアの記者の方から『何故いじめ問題は解決しないのか？』という質問をよく受ける事があります、大抵『大人がこの問題に向き合い学ばないこと、そして、個を認めずに競争社会を助長した結果なのではないかと感じている』と答えています。

子どもを取り巻く問題に向き合わず、学ぶこともせず、そして様々な格差を容認している事が、人間関係の分断を生み出す原因になっていると感じます。

人間関係の歪みの原因を「一人一人の違い、個の多様性を認めないこと」と私は感じているわけですが、コロナ感染問題が更なる拍車をかけているのかも知れませんが、これをきっかけに将来の日本のイメージを描き直す必要があると思っています。

新型コロナ感染により大人もストレスを抱え、子どもたちとの関係にも歪みが生じると想像出来ますので、今こそ私たち大人がしっかり支え合っている姿を子どもたちに見せ、大人と子どもの世代を超えて支え合う関係が生まれたら良いと考えます。その道しるべを示すのは当然大人ではないでしょうか。

子どもの命と心を守る責任を今こそ実感しなければいけない時だと思います。その意味で、いじめ問題の現在を作ってしまったのは子どもではなく大人であるという事を認識し、その事を念頭において問題の解決を目指す必要があると考えます。

まずは、私たち大人が学ぶこと、そして事実に向き合う事が基本ですから、そのために今の状況（上から目線の発想）を変える必要があると思います。

今のところ各学校にはいじめ対策委員会等が存在してはいても形骸化している学校が多く存在します。

また、そこが機能していないだけでなく家庭と学校との連携が生まれづらい環境は変わっていません。

いまだ、重大事態発生時に隠蔽や虚偽報告をする学校は後を絶たず、事実に向き合う事が出来ない状態が続いています。この問題を改善するためには、多くのいじめいを漏らさず拾い上げ、被害を感じている子どもの心にしっかり寄り添うことが必要だと思います。

法律で定められたいじめの定義に対して、「子どもがいじめられたと言ったら全ていじめになってしまい、現場が大変になる」という意見もありますが、悲痛な子どもの声を漏らさず拾い上げるという観点で見れば、最初はそれでも良いのではないのでしょうか。

まずは被害者に寄り添う、これは全ての基本です。訴えをしっかり受け止める事が重要であり、結果として「いじめでは無かった」「勘違いだった」という別の所に原因があるかも知れませんが、そういった確認の手間を惜しんではいけないと思います。

いじめに該当するかどうかは、一旦受け止めた後の話になる訳です。

子どもの“感じた心”に寄り添うことが苦手であったり、被害者側に責任転嫁する姿勢を示す大人たちが、子どもとの信頼関係を損ねているのだと思います。

また、子どもたちは日々大人から競争を強いられているという状況があります。競争をさせることによって子どもたちに何を期待しているのでしょうか。

もしその成果を、学業の成績アップや将来の日本や自分の幸せの為等と期待しているのであれば、それは勘違いだと思います。

理由は明白で、競争を助長することが結果的に人と人の分断を生むきっかけとなってしまいう危険性がとても大きいからです。

個々人が「自分が一番」を追究している環境を想像してみてください。本来的に人が生きていく上で大切な「支え合い」が軽視され、不自然な格差に疑問を持つ事もなく、偏見を持ち、自己中心的な思考になってしまうリスクが増大していくのではないのでしょうか。

いじめは、日常子どもたちが過ごす学校現場で起きているだけでなく、ネット等のいじめにより学校以外の場でも起きているわけですから、そのストレスや苦しみは想像を絶するものになっていると思います。

ある子どもは私に対して「圧倒的な恐怖」という言葉でいじめを表現していました。大人の想像力の欠如を念頭に置いた上で、この言葉の意味深さを感じとって頂きたいと思います。

私は活動で多くの学校に伺い、いじめを通して人権を考える講演をさせて頂いていますが、残念ながら保護者の参加はわずかです。

学校で起きているいじめ問題に関して、あまり感心を示さない大人が多い状況から、「子どもを守る意識の脆弱さ」をここでも実感しています。

その結果、大人と子どもと一緒に考えるという何より大切な時間を作り出すことが出来ないのです。

しかし、前述した子どもの幸福度37位という順位を飛躍的にアップさせることは不可能ではないと思っています。それはいじめ発生現場である学校にいる先生方に基本的ないじめ対応を身につけて頂くことであり。その対応を常にアップデートさせること。それは決して難しいことではないと考えます。

それは正しいいじめ対応を学ぶことなく旧態依然とした対応を続けている姿勢を見直してみる事だと思のです。自分が正しいと思っていた対応に間違いがあったかも知れません。それらを一つ一つ見直しをする事から始めることなら可能になるのではないのでしょうか。その為にはまず、事前にしなければならない事があると思います。それは、大人も子どももいじめに対する認識を変えるという事です。

いじめ行為は、児童虐待防止法に定義されている虐待行為と同様の行為でした。虐待を受けている子どもに『虐待ぐらいで』とは言えないはずです。

いじめの発生は、重大事態発生の可能性も十分あります。早い段階で正しい対応が必要なのです。

そこで次に正しい対応について考えてみると、基本として身につけておかなければならないのは、絶対に被害者責任論を言わないことです。

大人は何気なく「相手にイヤだって言った?」「もっ

と強くないと・・・」「あなたにも何か原因があるんじゃない?」「辛いけど頑張って乗り切ろう」等と言ってしまいがちですが、辛くて辛くて、勇気を振りしぼりやっと大人に伝えた時の言葉として考えてみると、大いに問題があると思います。

「イヤだって言えない私がいけないの?」「私が弱いからいけないの?」と自分を責めてしまい、苦しみを受け止めてもらえなかった大きな落胆を生み出します。

被害者責任論は大人と子どもの信頼関係を壊し、相談した子どもは二度と相談に来てくれません。

また、これも大人は何気なく言うてしまうのですが、子どもが望む前に自分の考え(解決法)を言うてしまうということです。子どもはまずは、その苦しみを理解してくれる人を探しています。

大人からの一方的な解決策の提案では無く、苦しみに寄り添いながら一緒に考える事が大切なのではないのでしょうか。

子どもにとって大人が提案する解決策は「それが出来ないから相談しているのに」ということかも知れません。子どもの思いを尊重しながら複数の提案が生まれれば良いと思います。考えが行き詰まっている時、選択肢が沢山あるという事が一つの安心に繋がるかも知れません。

子どもたちの苦しみのきっかけや幸福度を奪うきっかけがいじめであったなら、大人の対応能力がいかに重要かということを示しています。

更に、学校現場と家庭の連携があれば、認識の共有も生まれ、更に救われる子どもは多いと思います。

虐待については、先ほども申しましたが、大人の“子どもを守る”という意識がまだまだ脆弱であり、通報につながりにくいという問題があると感じます。

通報時に個人の情報を伝えなくとも良いことなど、通報しやすい情報等を広く周知することが重要ではないのでしょうか。虐待が激増しているということは、安心して生きていくことの出来ない子どもたちが激増しているということの証左であり、憂慮すべき問題です。

私自身も新型コロナウイルスにより生活環境が大きく変化してしまいました。コロナ禍以前は新幹線、飛行機等を利用し各地の学校等への講演で飛び回っていましたが、直接現地に入っの講演がめっきり減少した近頃では、三食を自宅で作り、人混みを避けながら散歩をするという自粛生活になってしまいました。

このような生活の大きな変化により当然ストレスも溜まりますが、それ以上に、講演の減少によって、子どもたちと心と命を考える機会の損失が生じてしまっているのではないかと考えてしまいます。

子どもの幸福度37位という順位に危機感を持ち、大人が工夫をし、今一度子どもを取り巻く環境に目を向け、その機会を生み出していきたいと思います。

そしてその為に自分が出来る事を探したいと思っています。

◆ 活動のご報告と今後の予定 ◆

日付	主催者	都道府県	都市	人数
2020/10/6	箱根町立箱根中学校三年生	神奈川	足柄下郡	50
2020/10/10	藤嶺学園藤沢中学校一年生	神奈川	藤沢	110
2020/10/13	箱根町立箱根中学校二年生	神奈川	足柄下郡	50
2020/10/14	千葉県教育庁社会人権教育指導者養成講座	千葉	千葉	90
2020/10/22	津山市立津山東中学校(DVDによるリモート授業)	岡山	津山	220
2020/10/23	備前市立備前中学校(DVDによるリモート授業)	岡山	津山	350
2020/11/5	倉敷市立黒崎中学校(DVDによるリモート授業)	岡山	備前	100
2020/11/9	岡山県立倉敷天城高等学校(DVDによるリモート授業)	岡山	倉敷	1,170
2020/11/10	岡山県立林野高等学校(DVDによるリモート授業)	岡山	倉敷	400
2020/11/13	横浜市瀬谷区役所職員人権研修	神奈川	横浜	50
2020/11/19	練馬区立旭丘中学校	東京	練馬	180
2020/11/25	所沢市家庭教育学級公開講座	埼玉	所沢	100
2020/11/27	真庭市立遷喬小学校(DVDによるリモート授業)	岡山	真庭	140
2020/12/1	岡山県立岡山操山高等学校(DVDによるリモート授業)	岡山	岡山	910
2020/12/2	赤磐市立高陽中学校(DVDによるリモート授業)	岡山	赤磐	350
2020/12/4	新発田市立加治川中学校(DVDによるリモート授業)	新潟	新発田	140
2020/12/7	岡山県立倉敷中央高等学校(DVDによるリモート授業)	岡山	倉敷	210
2020/12/9	三重郡川越町立川越南小学校教員研修(DVD冊子による研修)	三重	三重郡	24
2020/12/11	赤磐市立赤坂中学校(DVDによるリモート授業)	岡山	赤磐	110
2020/12/14	神奈川学園中学校	神奈川	横浜	200
2020/12/18	高梁市立高梁東中学校(DVDによるリモート授業)	岡山	高梁	60
2021/1/18	新発田市立紫雲寺中学校	新潟	新発田	210
2021/1/26	真庭市立木山小学校	岡山	真庭	50
2021/3/8	山手学院中学校	神奈川	横浜	350
2021/4/15	藤嶺学園藤沢中学校一年生	神奈川	藤沢	
2021/6/8	滋賀県総合教育センター初任者研修	滋賀	野洲	200
2021/6/10	滋賀県総合教育センター初任者研修	滋賀	野洲	200
2021/7/2	葛南地区社会人権地区別研修会	千葉	千葉	100

新型コロナウイルス感染の影響で講演数が激減する状況下ではありますが、上記にあるように、これだけの行政・学校等においての様々な創意工夫により講演を実現することが出来ました。関係者の方々のご尽力に感謝申し上げます。実はDVDのリモート授業等で子どもたちとのコミュニケーションも困難な状況の中、十分な効果が望めないのではないか？という危惧もありました。

しかし実施後に講演先から送られてくる感想文などを読ませて頂き、子どもたちは想像以上に深い部分まで感じ取ってくれていることを知ることが出来ました。

未だに先行きの見通せない状況の中、当たり前の平穏な日常を一日も早く取り戻すことが、子どもにとっても大人にとってもいかに重要なことであるかを実感しています。